

研究所報

No. 7

発行所 社
 平田篤胤佐藤信淵研究所
 秋田市千秋公園1-16
 電話 0188-32-4496

歌われたる平田篤胤

齊藤 壽胤

近世後期における国学の一翼を担い一家を成した平田篤胤は、近代においても様々な影響を及ぼした一人であることは周知の事実である。篤胤はこの秋田における郷土の偉人として近代の発展期において、先覚者、徳学の士として崇められてきた。その中では特に神社に祀られてきたことも、顕彰と威徳を發揮せしめてきた一つであろうことは間違いないだろう。

平田篤胤の業績や人物、学問については今更いうまでもないが、秋田では殊に学問の分野で偉業を成し遂げた人として、後に教育関係ではすこぶる学問的事跡の遺徳を崇えてきた。その一方には歌として愛唱されるものがあった。本稿は、明治以降におけるこの歌にあらわされてきた篤胤の精神性や思惟を探ることにあり、それらがどのような経緯をもつのかを明らかにしたいと考えるものである。ここに歌われたる篤胤像は平田思想の一部がどのように地方的展開したかをも知ることにある。

目次

歌われたる平田篤胤	齊藤 壽胤
鹽竈神社博物館「黄金花咲くみちのく展」	
開催による佐藤信淵著述「山相秘録」の紹介	
平田大人門弟の由緒消息(二)	遊谷鐵五郎
研究所記事	
	18 7 6 1

二

明治以降で最初に歌われたのが、平田篤胤頌徳歌であった。これは佐藤信淵の頌徳歌と同時につくられたものだった。松本秋次はその作曲及び楽曲の考察を「平田佐藤両大人頌徳歌について」として述べている。頌徳歌の作曲内容については同稿に譲るとして、今その成立をみてみると、正式な名称は「神靈真柱大人を称え申す唱歌」と題されるものである。神靈真柱大人とは弘化二年に神祇伯家より授与された篤胤に対する謚名であることは「御一代畧記」(平田鐵胤撰著)にも明確に記されている。この神靈真柱大人を称え申す唱歌は、明治四十三年六月の秋田県教育会総会において彌高神社の崇敬のためとするところの具体策を議題にした中であつた。明治二十一年に結成以来秋田県教育会は秋田県出身の二大学者平田篤胤佐藤信淵の偉業を顕彰し亀鑑としてきたもので、秋田県教育会の目的である教育・学問の振興たる精神的バックボーンとして二大人の偉徳を崇えることにも大きな力を注いできたものであつた。そのために同会の事業として二大人を祀る彌高神社の創立に多大な力を注ぎ、そして崇敬維持にも並々ならぬ貢献をしている。さらには教育会雑誌の名称を「彌高」としたことからも、その強い意識があることは充分理解できる。このような状況の中で秋田県教育会では、明治四十三年に両大人の歌詞をつくり更に感化につとめようとする意見が出されているのである。これに基づき明治四十四年には小学校校用唱歌として頌徳歌を正式に制定している。即ちこれが「神靈真柱大人を称え申す歌」であつた。

明治四十四年四月十七日付文書によれば秋田県知事から文部大臣に宛てられた「唱歌擇定ノ件」が提出されている。

按

平田篤胤佐藤信淵ノ二大人ハ県民ノ崇拜スル御人ニ之有候ニ付今回両大人ノ徳ヲ頌シタル唱歌ヲ制定シ 本県各学校教授上ニ使用致シ 後進ヲシテ発憤興起セシメ度候條 至急御認相成度可別紙歌詞並ニ譜表添付 此段稟請候也

と、その主旨を述べている。これによって作歌御歌所主事坂正臣・作曲女子音楽学校校長山田源一郎があたり、いくつかの修正意見を経て執行されたものである。昭和二十三年五月をもって解散を余儀なくされた秋田県教育会等のそれまでの指導によって、各学校に篤胤信淵の肖像さえ、教室や講堂などに掲げるものであった。これは既ち秋田県教育の精神的中枢として位置付けするものであった。この頌徳歌の詩文は次のとおりである。

神靈眞柱大を稱へ申す唱歌

一段

しげりあひつる 酸草を
荒き氣吹に 吹靡け
一つ尊き 大君の
道を世にこそ しめしけれ

二段

雲のおほひし 天つ日に
みそさやかに 仰ぎ見る
御代となししも おほかたは
荒きいぶきの ちからなり

三段

ひろきまなびに敏きころ
四方にをしへを 敷きみてて
出羽秋田の くにさとの
はまれあげたる 神は是

歌の詞文中には篤胤の名は一つも出ていないが、全体的に意気軒昂とした中で国学者篤胤の面目躍如が窺えよう。そして、この頌徳歌は篤胤が唱われた初見でもあるとみられる。

頌徳歌はこうして教育界内外に唱われたものであったが、大正十一年の創立とする現在の秋田県立秋田高等学校の校歌の中にも篤胤が詠われている。秋田高校は明治十五年に秋田師範学校の一区画を校舎にして開放された秋田中学が前身となっている。秋田師範学校は現秋田大学の前身となったものだが、先に述べたところの秋田県教育会の設立に尽力した文部省の庵地保が秋田県学務課長兼秋田県尋常師範学校校長を任じられているもので、庵地は秋田県教育会の初代副会長となり、教育会の事務局もまたこの師範学校におかれていたのである。このような関わりはやがて制定される秋田中学校の校歌に現われてくるのであった。

校歌の制定のことは「秋高百年史」*にも大筋の経緯が記されているが、大正十一年七月十五日に正式制定されたものである。校歌は土井晚翠作詞・梁田貞作曲となっている。関係の詞文は次のとおりである。

篤胤 信淵 ふたつの巨靈

生れし秋田の土こそ薫れ

先蹤追ひつつ未来の望

ゆたかに健児は其途進む

第三節目の詞文にあるとおり、信淵と並び称されてきた。晚翠はこの作詞にあたっては仙台に住して作ったとされており、全体は五節から成る八七調のものである。

ところで晚翠は生涯かけて各種学校の校歌を二一四も作詞している*。晚翠の人氣がいかなるものであったのか、この一面でも窺えるが、その作風には晚翠の思惟が強くみられるもので、単なる作詞家と異なる面をもっていた。晚翠の年譜や事跡についてはいまさら述べるまでもないのだが、早くから日本的抒情に心を寄せていたことが知られる。晚翠といえは「天地有情」の詩集や名曲でも名高い「荒城の月」の作詞などは極めてなじみ深く、今日でも愛唱されている。これらは若い

頃に西欧諸国へ留学した英文学・仏文学・独文学を研究した経緯をもつことによると考えられる。このことは後における篤胤に関する作詞をいくつかものすることにおいて、全く無関係とは思われないものが窺える。晩翠の生涯で注目しておかねばならないことは、仙台生れで留学等による以外は仙台をほとんど離れることがなかったという事実と、晩年に近い昭和二十三年前後である。つまり、東北ということと、秋田出身の篤胤に対する思惟とは無縁ではなからうし、昭和七年に自身の長女、翌八年に長男、昭和十五には残された次女を相次いで失うという不幸にあっている。些か篤胤の生涯における家庭的に恵まれなかった境遇と重なり合う部分もみられるからである。こうした境遇は昭和十五年頃からとみに心靈科学に興味をもつこととなり、その実験などに手を染めていた。霊学に関心を示したことが、相次ぐ身内の不幸に関わりをもっているとするならば、篤胤の幽冥界や霊学の研究たる部分と一致するというのは単なる偶然であらうか。ともかく晩年の霊学研究は昭和二十二年「心靈研究」第一号に「心靈科学について」を発表しているほど熱心であったらしい。この年の五月には彌高神社にも参拝していることが芳名簿の墨跡も鮮やかに遺されているのである。

このような晩翠からして、秋田高校校歌に謳いあげた「篤胤信淵」の詞文には、作詞者の思想と秋田の生んだ偉大なる人物としての文化的教育性をも合わせもった詞文となったものと考えられる。この校歌の全詞文をみてみると、秋田の歴史や文化の香を肌理細やかにして敏感に覚ゆるものがある。そこに詩人としての感性も豊かであったことは言をまたないであろう。浪漫詩人としての晩翠があり、抒情的感性はやはりこうした詞文に見事に表出されているといえる。

興味深いことに晩翠はこの他とは別に二つの篤胤に関するものを遺していることはあまり知られていないだろう。それは埼玉県越ヶ谷の久伊豆神社境内に建立されている晩翠の詠んだ歌碑である。越ヶ谷は気吹舎門人がいたところで、門人の一人である油長こと山崎家一三代長右衛門篤利は文化十三年に入門以来、篤胤の学問を積極的援助をし

たほか、養女鐵瀬を篤胤の後妻に世話をするなど、並々ならぬ力を注いでいたとされる門人の輩出した所でもある。それに関わり、篤胤はこの地をしばしば訪れ講延をしたらしい。久伊豆神社もその緑地で篤胤の仮遇居が遺されている程であるから、その縁は切っても切れない土地である。歌碑というのは、土井晩翠詠・笹川臨風染筆のもので、昭和十七年十月に建立された。

気吹の屋 一つのみ霊の宿れりし
あとなつかしき 越ヶ谷のさと

同所にはもう一碑「平田篤胤遺徳之碑」が同時期に建立されている。こちらは山田孝雄の撰文に渡辺金造の題字である。山田・渡辺の二者はいずれも平田篤胤の研究で著名な人でそれぞれ関係の著作もある。遺徳文碑や歌碑は平田篤胤研究会が行なった事業によるものであった。晩翠が山田孝雄・渡辺金造という平田篤胤研究の泰斗とされた二者と並んで、平田篤胤と関わっている意義は非常に大きいものがある。



越ヶ谷久伊豆神社にある土井晩翠の歌碑

昭和二十二年五月十五日

土井晩翠

彌高神社
参拝芳名簿

建碑の記念除幕式は昭和十七年十二月十三日に越ヶ谷高等女学校において行なわれた。この記念式で、晩翠は靈學に関する講演と、五節にわたる東京音楽学校作曲「平田篤胤先生頌」の歌を遺したのであった。歌の詩文は次のようなものである。

土井晩翠 作

一、「こしき山の山道も直に通らば通るべし」

転ばしかねるわが心 神の捨てけむ千曳石
道に勉めてやまざりき

二、難きを忍び「せせらぎに潜める龍の雲起し」

天に知らるる時致り 心血そめし大著作

雲井の上に榮ありき

三、雲井の上の高き榮 高きいさをの蔭にして

力を添へし山崎の あるじ 越ヶ谷 この里の

生れ今こそ偲はれる

四、「汐の八百重の八十国この正道を弘めよ」と

雄をたけび高きいぶきのや 一つのいぶきのやみてより

百度移る春と秋

五、昭和新たな御代にして

八紘一宇おいななる 理想のもとに大東亜

南洋ともに靡くとき 一つの御魂はほほるまむ

この詩文は篤胤を見事なぐらい適切に、まさに頌徳に値する詞文である。ただ、この歌がどの程度愛唱されたのかは不明である。

ところで晩翠は島崎藤村と並び称される代表的詩人である。晩翠と藤村は詩人的特徴が明らかに対象的であるといわれる。藤村がわが国の文学伝統をふまえての和語を駆使して、所謂抒情詩を綴ったのに対し、晩翠は海外の文学伝統をふまえて漢語を用い、多くの人名地名を点綴させて叙事詩をものする手法の特色がみられる。これらは一見相反するかにみられるが、その底分には国学的思惟が流れていると思われるのである。藤村の国学的発見は伝統文学や和語を使った点や、「夜明け前」の小説を書かせた藤村の心情に行きあたり、これに對

し晩翠のそれは、詩歌の世界に西洋性が強く出されてはいるものの、その裏面にこそ国風文化の存在を強調するような面が多く存するのである。即ち晩翠の「荒城の月」を見れば明瞭であろう。杜甫・李白・宋之問などの諸作や「伊勢物語」の古歌などを踏まえ、仙台青葉城と会津鶴ヶ城にそのイメージを得たものという「荒城の月」は、それらを端的に具顕するものであると考えられる。晩翠は昭和二十二年に西条八十主宰の「蠟人形」に「藤村時代の思ひ出」を寄稿していることは藤村をして何らかの共通の意識化が存在したことを意味するものがあつたとも考えられる。ともかくも、晩翠の洋行留学において日本文化をアイデンティティとなす契機となつたことは想像に難しくない。やがて心靈科学に導びかれていったことは、例え表出されないとところに接点があつたとみても無理な見解ではなからう。

いずれにしても晩翠の作詞した「秋田高校校歌」、「平田篤胤先生頌」にしても篤胤のすぐれて徳なるものを学問と精神において謳いあげたものに外ならなかつたのである。

篤胤が歌われたものでも一つは、「秋田県民歌」があげられる。全県民に歌われた、秀麗無比なる鳥海山よ——と四小節からなる詞文は、秋田の風土、歴史、文化、産業、自然などをたくみに歌い上げたものである。この県民歌は昭和五年十月三十日に制定されている。その第三章節には、

篤胤信淵 巨人の訓え

久遠に輝く 北斗と高く

錦旗を守りし 戊辰の榮は

矢留の城頭 花とぞ薫る

歴史はかくわし 誉れの秋田

というものであるが、秋田の歴史的経緯と篤胤偉徳を短文で表現している。

秋田県民歌にこの「篤胤信淵巨人の訓え」の文が入れたのは恐らく次の思惟があるからだろう。というのは、この県民歌に昭和五年に歌詞の公募が先であり、公募に応じて選定されたのが倉田政嗣のこ

の詞文であった。倉田は秋田師範学校卒で小学校教諭を勤めるが疾患で闘病生活を経て、のちに村会議員も務めるといふ人物でもあった。

「白日」社友の歌人としても知られる。倉田の歌いあげた詞文に曲をつけたのが、「浜辺の歌」や数々の名曲を遺している成田為三である。実に縁故とは不思議なもので、成田と倉田は師範学校の同級生なのであった。成田為三は芸術的童謡作曲の創始者としても音楽史上に輝くもので、その根底には秋田の風土性に築き上げられてきたものが見られるという指摘もあるから、成田には県民歌に対する強い思い入れがあったに違ひなからう。従って倉田の詞文に対しての曲付けは端麗にして雄渾莊重なものである。その結果、秋田県民歌は長野県・山形県とともに日本三大県民歌と称えられてきたのである。

ここにおいて倉田政嗣の詞文は、成田為三の作曲とともに秋田師範の結びつきに遡ってみる時、師範学校が秋田県教育会の事務局があったり、教育会の思维的環境が秋田県教育会の事務局やそれにたずさわる人々の環境が影響していたと見るのは全く意外ではなからう。仮に必ずしも直接的な関わりには及ばなくとも、少なくとも秋田の地における平田篤胤を郷土の先覚者として誇れる思惟は、倉田と成田には深いものであったと思われる。事実上、篤胤の外には信胤の名が入れられるという以外に、詞文には他の人物の名がでていないのである。

近年「旧県民歌に異議あり」として、秋田県民歌の第三章三節目から五節目の詞文を否定した意見がある。これは「篤胤信淵」の一文には一言もふれずに戊辰戦と明治維新に対する批判に終止しているが、筆者には秋田のアイデンティティが戊辰戦をも含めた歴史的認識こそ大事と考えている。この詞文全体における篤胤信淵を秋田の生んだ偉人として、その足跡などから学ぶことが秋田のアイデンティティの一部だろうといえるからである。歴史的経緯は篤胤を生んだ秋田の足跡そのものであり、これに過剰な意識と事実認識の齟齬は素乱の基となるだろうし、この県民歌の全詞文さえも否定することになり、自らの文化性まで見失うことになるものと考えられるのである。

三

秋田で歌われてきた篤胤は、史的に視るならば秋田県教育会を中心として学問と偉業に対する精神的中心に位置させてきたといえる。その意味からして「歌」という普遍的な価値を付加させて衆諸に識らしめてきた意義は大きいものがある。

個々の人の果す歴史的役割というのは人間性の善悪や好き嫌いという判断とは全く別の次元から考えねばならない。ここに歌われた篤胤とは何んであったのか。篤胤を歌いあげてきた中からは、篤胤の示した道、或いは求めようとした道において、極めて学ぶべき、然もそれを亀鑑とした個々人の活動こそ、文化を育むものだということを強く認識させられるのである。それを汲みとることが、この歌われた篤胤の本義があると思うものである。

*1 「研究所報」第六号（平4・彌高神社平田篤胤佐藤信淵研究所）所収。作歌・作曲者及び楽曲の考察として詳細な稿文がある。ここでは制定の事については若干ふれられている程度である。

*2 「校歌制定の経緯」（『秋高百年史』昭48）

*3 「上井晩翠先生校歌集」（昭59・同顕彰会）

*4 山田孝雄・東北帝国大学教授・皇学館大学学長であった。「平田篤胤」等、篤胤に関する著作多数。

*5 渡辺金造・陸軍中將。篤胤研究家で著書「平田篤胤の研究」がある。

*6 秋田魁新報社（昭63・12）に下田式山稿で「戊辰の年を送るに当って」として戊辰戦と秋田のつた歴史的態度を批判している。

（本所研究員）

鹽竈神社博物館「黄金花咲くみちのく展」の開催による

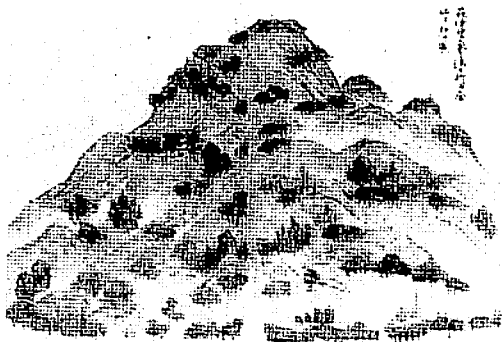
佐藤信淵著述『山相秘録』の紹介

「山相秘録」

近世に近くなる戦国期になって、採掘製錬技術が進歩して、古代中世の単なる洗取りでなく、抗道を掘って金鉱石を採掘精練するようになる。

この様な様子を「山相秘録」がよく伝えている。

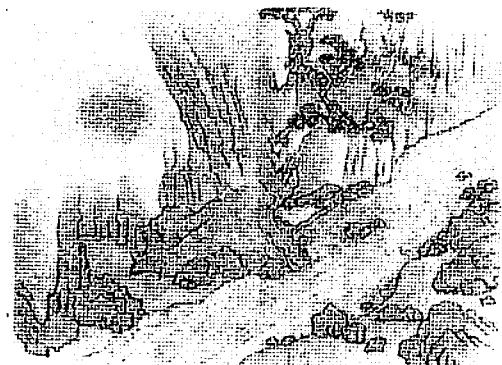
「山相秘録」は、鉱山技術書で



夜中金山の精気を望む図「佐藤信淵鉱山学集」



諸金含鉱山を正面より遠望する図「佐藤信淵鉱山学集」



金山の相を示す図「佐藤信淵鉱山学集」

ある。鉱山の見分け方と目的に応じた鉱石の発見法と開発法、経営法が論じられている。本書は佐藤信淵（明和六年1769〜嘉永三年1850）

いわく、祖父が原著をあらわし、父が校正筆録したものを文政十年（1827）佐藤信淵が収集した。

佐藤信淵は秋田県雄勝郡西馬音内（羽後町）出身の国学者で経世策に関する著作が多い。

佐藤家三代に亘る著作なので近世の鉱山史を窺うに足る書籍で、明治九年上下二巻本が流布している。

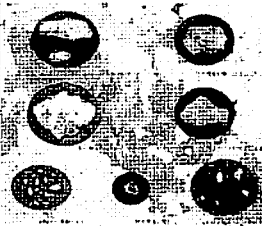
上巻は、第一総論、第二金山、第三銀山。下巻は第四銅山、第五鉄山、第六鉛山、第七錫山、第八水銀、第九硫黄などから成る。金山については、先ず川にある砂金をさがし、その上流をたどりて鉱

脈を見付けるべしと。

金の種類は、岩石より採るを山金と名付け深黄である。土中・井中・海砂中・流水より採るを水金と名付け淡黄である。金山開発法抗道水ぬき技術的なことと、先ず第一には神祭をして神人共にならぬばならぬと説いている。この金山抗道については「日本山海名物図絵」にも解説がある。

これらの鉱山技術が、明治維新以降の西欧鉱山技術を受け入れる下地となっている。

黄金花咲くみちのく展



鹽竈神社博物館

黄金花咲くみちのく展

開催 平成五年一月一日〜十七日

宮城県塩釜市塩釜神社博物館

監修 国立歴史民俗博物館

情報資料研究部教授

工学博士 田口 勇

執筆 尾崎保博（二章以降）

新沼 泉（一章）

平田大人門弟家の由緒消息(二)

瀝谷 鐵五郎

大友真枝吉言家・入江種健
(種彦)・種敏兄弟の巻

一、大友直枝吉言家

(1) 秋田国学の先覚者

① 大友吉徳

大友直枝吉言は平田大人生前の「秋田人」門人第一番の入門者で文化九年(一八一二)江戸において入門したことは衆和のことであるが、「秋田国学の先覚者」直枝以前の大友家一族の二大人に注目を要す。その一は大友吉徳、その二は大友親久である。

大友吉徳の家系は、保呂羽山波宇志別神社の神官大友宗家の支族で医師道月を祖とする。吉徳は道月と同じく大友宗家の分家大友親賢の二男で、子のない道月の養子となり医名を玄圭といった。

吉徳は碩学(大学者)鴻儒(儒学の大学者)皆川淇園・本居宣長に国学を、江戸で石川玄常・京で和田泰純に医学、加川子教に産科を学んだ。吉徳は本居家の学問を

秋田に伝えたが、国学者としてより、むしろ医家として名高い。吉徳(玄圭)を医家としての名を高めたのは、雄物川沿岸住民の間に発生する奇病の病原体が、恙虫(ケタニ)であることを発見してからである。文政十年(一八一七)没、58歳。

玄圭(吉徳)の嗣子吉徒(玄宰)は父の遺業を継いでケタニの研究に努め、父の内服薬による治療とは別に外科的治療法(ケタニ堀り)を新に完成した。

② 大友親久

大友親久は、直枝吉言の叔父に当る。早くから久保田城下に出て、中山菁莪(明徳館教授)について儒学を学んだ。長じて古学を志し享和元年(一八〇一)七月、郷里を出立し九月伊勢松坂に出て、十三日本居宣長に入門した。このあと間もなく宣長は風邪となり容体は悪化し同二十八日死去したので、親久は春庭(宣長の長子)、太平(宣長の養子)に師事し、文化

二年(一八〇五)十二月二十日松坂に客死するまでの四年半、古道の学(国学)を学んだ。親久の国学は主として歌学に重点を置いたようだが、30歳にも満たぬ業なかなばの若さであった。

③ 大友直枝

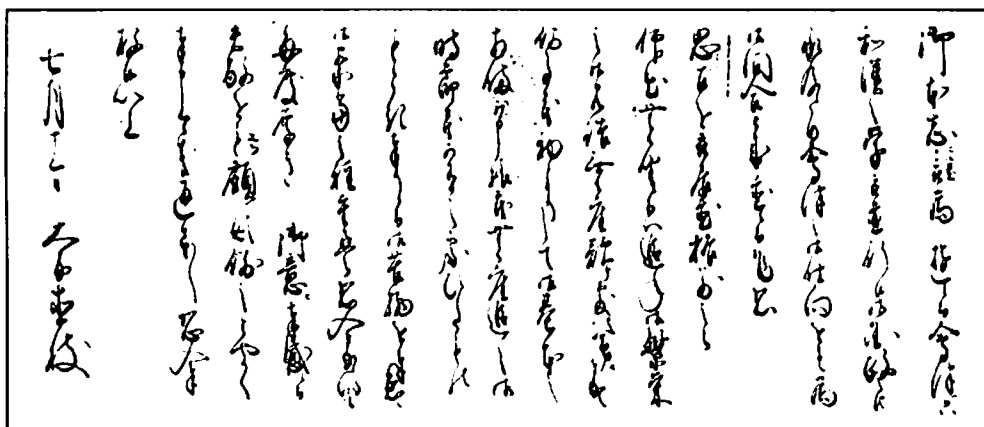
直枝は初め叔父親久と共に中山菁莪の門に儒学を学んでいたが(名乗の吉言は、菁莪の命名)、親久の伊勢松坂出立後は古学に心をひかれ、親久を深く敬慕していた。その叔父の訃報に接した直枝は、親久の遺志をついで松坂遊学の願望を高めた。かくして大友家から秋田藩に「神道成就」という名目で、藩に遊学の願書を提出した。秋田藩主は佐竹義和、財用奉行は岡見知康、共に国学に理解のある仁であった。前例のない藩費(留学期間五年、二人扶持給金十兩)を支給され文化三年(一八〇六)二月(22歳)留学の途についた。

四月、松坂本居家へ入門して国学を学び、このころから手紙を通して角間川の落合東堤を師とした。足代弘訓(国学者、伊勢外宮の禰宣、平田篤胤、鈴木稻彦らと盛んな文通をした。文化四年ころ、伴信友(国学者、若狭小浜藩士、宣長没後の門人)との交友もあった。

文化五年の春、京都に上り五月二七日「吉田神道家」に入門した。学頭山田大学に随身し、祭式有識故実を学んだ。同七年秋、江戸に下り蒲生君平(尊王思想家)の塾に入門した。君平は直枝の人物を高く評価し、帰国するとき「国重」の長刀を贈った。江戸では堀保己一(国学者、「群書類従」の編纂者)の和学講談所にも通学した。

文化八年三月、江戸を出立し帰国。同十年(一八一三)四月、家塾を開いた。門人は十五年間に、九三人におよんだ。門人の中には下総国や越後国などの遠国の人の名が「門人姓名録」に見られる(第(5)項、直枝の門人参照)。

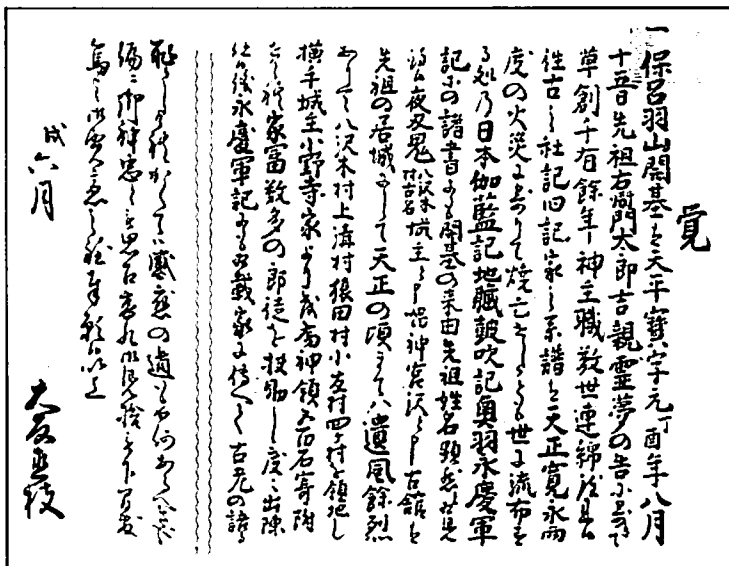
文政二年(一八一九)上洛し、神祇伯王殿白川御門葉(弼)医学眼科、衣関伊都伎源貫(二代目順庵)に師事し、持病の眼疾治療を兼ねて衣関流眼科医学を学び、同五年七月、眼科五流(大已貴命御遺伝神方、林流眼科、橋本流眼科、大森流眼科、阿蘭陀流眼科)の治療免許を得た。当代の権威であった衣関氏の学説と技術を、秋田に伝えた業績は大きい。また船橋家から「金針相伝」(内障開眼針)の医学を学び、免許を受けたという。文政六年久保田に眼科医を開業



直枝の筆蹟（大友家蔵）



直枝の画（大友家蔵）



直枝の書（秋田県立秋田図書館蔵）

し、名手とうたわれた。

直枝は藩校に国学部設置を運動し、文政八年十月、藩校明德館に「和学方」が設けられ、初代の「和学取立係」に補され、五人扶持を給された。和学方設置は、鳥居長秋、高階貞房、鎌田正家ら本居派の結束で実現、陰に岡見知康の援助があったという。

文政十二年（一八二九）六月十二日直枝は、45歳で死去した。文化十年から文政十二年までの十九年間に門人、百数十人に達した。

主なる著書に「三国社年中行事式」（神道）、「蘿園答問録」・「蘿園文集」（国学）、「眼目七二症図」・「眼科治療配剤」・「字茂礼木」(医書)、「松之落葉」・「世継草」(随筆)、「大友吉言問目」・「大友家伝記」などがある。また、絵を能くした。

(2) 中世における大友家の概系

直枝の生れた大友家は「保呂羽山波宇志別神社」の社家（神主）である。保呂羽山は、標高四三八メートル。波宇志別神社は、その山頂に鎮座する神社である。保呂山は、平鹿・仙北・由利の三郡にまたがり霊山として古くから庶民は山岳信仰の対象とした山で、山自体が崇敬されてきた。祭礼のと

きは、三郡の氏子数万が集まったという。

神社は、延喜式神明帳（延喜五年一〇二七）に記載されてある古社である。神社の創建・祭神・祭式・神楽・沿革等については、「雪出羽道一平鹿郡」（秋田叢書第五巻所収・昭和五年四月発行）以下「雪出羽道」というに詳しく誌される。

大友家は県内最古ともいうべき保呂羽山波宇志別神社の神主を代々連綿と勤めてきた古い家柄であり、本来は「大伴氏たらむ、ものに見えたり」と「雪出羽道」はいう。大友家の元祖については「雪出羽道」に「昔し天平宝字元年丁酉八月十五日先祖ノ吉親（右衛門太郎）霊夢の告ありて、保呂羽山の荒山中を磐根木ノ根ふみさくみて宮所を定め奉りて羽宇志別大神を崇祀して仕へ奉りし以後は神主の職に任されて、夜叉鬼（八沢木村古名）城主と号して神宮沢といへる古館は先祖の居城の旧にし跡にて（中略）横手城主小野寺遠江守義道朝臣より神領として五百石寄附せられ」とある。神社の創始は、天平宝字元年（七五七）大和国吉野・金峰山より蔵王権現を現在地に勧遷したのが、現神社の始まり

という。

夜叉鬼城跡は、現在の太友家より約二キロ離れた大森町の中心地に近い「神宮沢の館」といわれた場所であり、いまは山林になっている。右衛門太郎藤原吉親を初代に大友家は脈々と代を重ねたが、天正・寛永・昭和の年代に遭った三度の火災に多くの古記録を失った。

天正（一五八三—一五九二）の火災は、七代右衛門太郎吉継の代、吉継は「天正十六年（一五八八）奥羽兵乱に参加、証文・系図・宝物の一切を火災にて焼失。右衛門太郎吉継は保呂羽山開山以来の覚書を伝う」と「保呂羽山開山以来祭祀の次第」（大友家文書）にある。天正十六年奥羽兵乱云々とは

「雪出羽道」に「保呂羽山之神主として世々神職の家なれば、往古御開山之社記・旧記・ならびに家の系図・由緒等に至るまで数書伝来せしといへども、惜い哉天正年中、悉く火災焼亡のよし吉継の覚書に見えたり」とあり、さらに「我家に弓矢・鉄炮・鎗・長刀・甲兜・馬鞍・物の具のたぐひも其数多く貯へありといへるも、天正の火災に亡びて伝らぬ」とある。天正の「大友家戦禍」について

「大森町郷土史」は、次のように誌している（要旨）。

杜家の大友家は天正年間に最上義光の攻撃により小野寺氏が滅亡する際の戦に、小野寺の一部将として当主の大友右衛門太郎吉継が勇戦、遂に家屋は兵火に罹ったのであり、それ以前の史伝については焼けた太刀などを除けば、すべて徴すべき史料を失って、文献的には代数も順序も全く定めがたい五人の家主名しか伝わっていないのである（中略）天正期に吉継が数百の兵を率いて戦ったということは、菅江真澄の「雪の出羽路」などにも詳説がある（中略）大友家が中世の平鹿地方西部において、一方の土豪として強力な地

頭性を保有していたであろうことは疑いないことである。

したがって大友家の記録や世代数は、明確を欠く。吉継の覚書によって系図を示すなら、次のようになる。

吉永に至って初めて、記録の年月日が誌される。世代数は、名の伝えられた者に付して代数であらう。

横手城主小野寺義道は、神社を崇敬すること厚く神領五百石寄進し、秋田藩主佐竹義宣は百五十石寄進し国社として崇敬を篤くした。

吉永の次男10代吉廣は、秋田藩六郡杜家の大頭役を仰せ付かった。秋田藩の杜家組織は領内を10

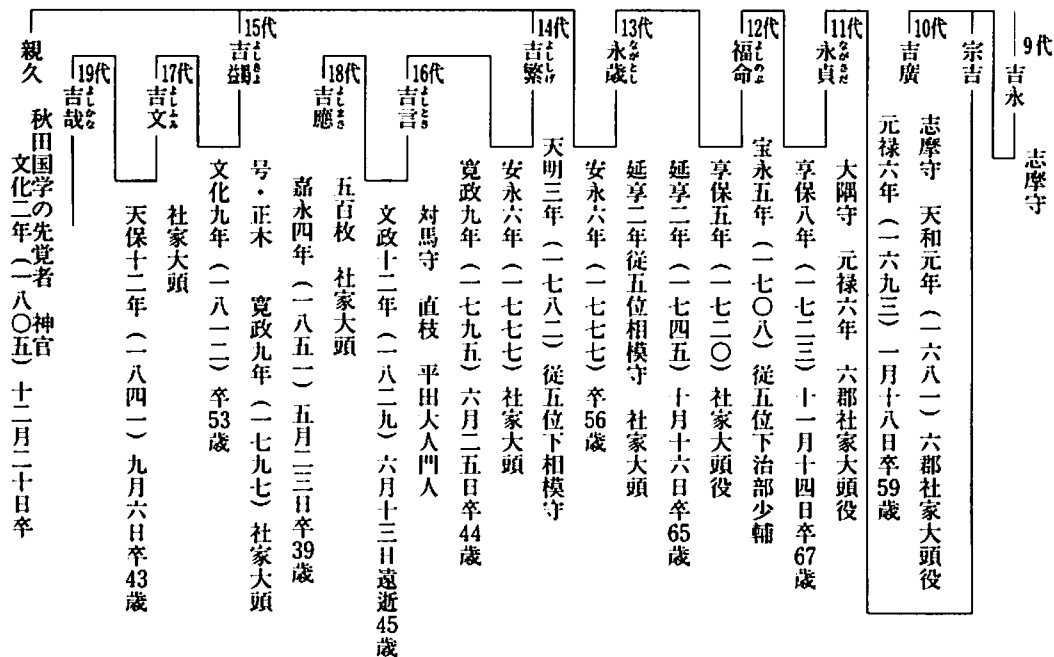
吉親……………吉量……………吉綱……………吉行

吉和……………吉直……………（天平宝字元年一七五七）から天正十六年一五八八までの八三年間不明……………吉継……………右衛門太郎吉継……………生死年月は不詳

八代 吉秀……………志摩手……………寛永十九年（一六四二）の火災に、天正火災に残った記録も悉く焼失

九代 吉永……………志摩守……………延宝六年（一六七八）二月十六日卒、72歳

(3) 近世の大友家



地区ほどに分け、各地区に腕頭を置き、地区内の社家を組下とし支配させ、社家大頭(定員二名)は寺社奉行の職掌下にあつて各組頭を支配した。大頭役は秋田藩内の社家(神主)を直接統轄する主幹であつた。この役は、代々仰せ付けられ近世末まで続いた。

11代永貞のあとを、12代福命が継承した。福命の通称は、清五郎。初名は吉命であつたが、將軍綱吉に障りがあつて福命と名を改めた。元和六年(一六八一)生、母は山形の太守最上義光の侍医山田民部の長女である。

天正・寛永の二回の火災に遭つて、すっかり衰頹していた神社を福命は一大神祠に再建した。彼は和漢の学に通じた学者であるばかりでなく、孝子としても広く知られた。

福命の母は「アケビ」を好んでいたので秋になれば八十歳の母を背負つて山野に遊び「アケビ」を求めて喰べさせた。彼は六十歳になつても母を背負つたという。その親孝行は藩主に知れ、享保十年(一七二二)八木沢の代官中村弥右衛門の推挙で福命は久保田城内、御会所で藩主より賞金として錢十六貫文を下賜された。

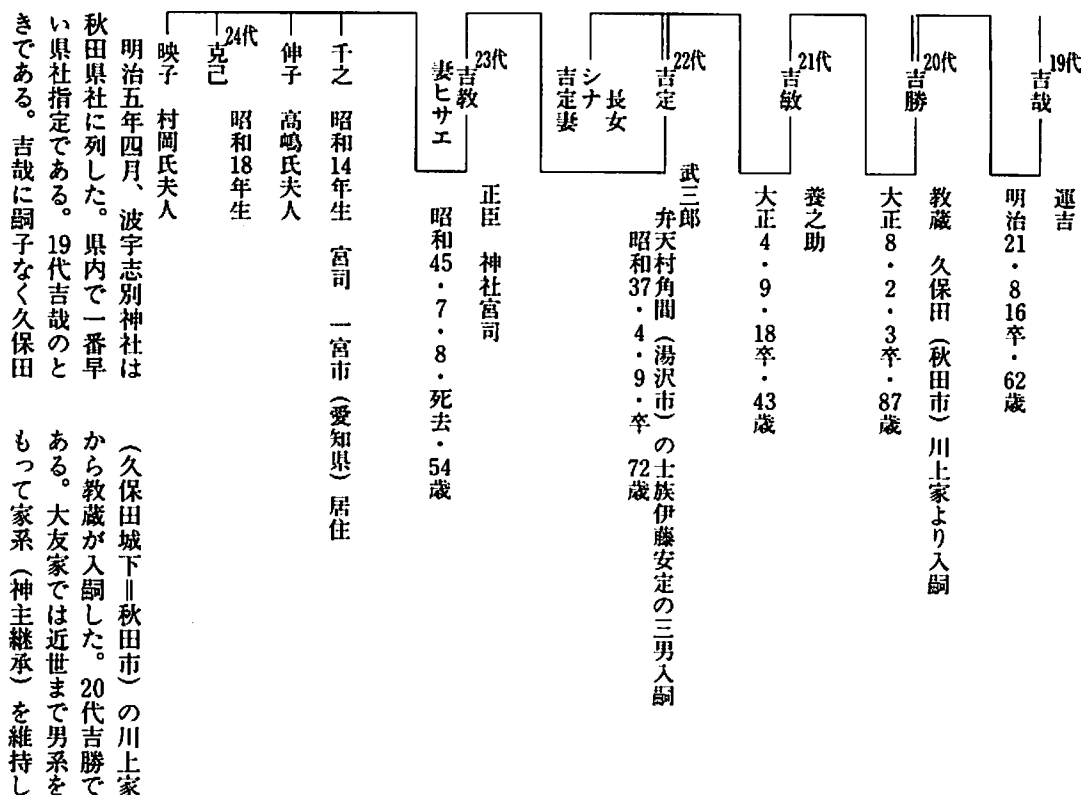
福命の後嗣は13代永歳、武歳とも称した。永歳のあとを長男吉繁が嗣いで14代。吉繁の通称は、清五郎。15代は、吉燭。通称辰五郎、正木と号した。正木の弟親久は通称永太、榮太、号を久盤、八十広と称した。享和六年(一八〇二)九月十三日、伊勢松坂に国学の泰斗本居宣長を訪ね、その門下となる。入門後、間もない歌会で親久は

うれしさにはるばるしたふ神風の伊勢に今宵の月を見るかなと詠んで、宣長の教えを請うところ宣長は

はるばるとしたい来にける神風の伊勢に今宵の月を見るかなと直したという。親久については、(1)の②に略伝を掲げた。

16代吉言は、本題の主人公(ヒーロー)。吉言は通称直枝といい、秋田国学の普及者として名がある。幼名を徳松、對馬・藤園と号した。直枝については、(1)の③に略伝を誌してある。17代吉文は、通称義之助・外記と称した。18代吉應は直枝の子で、通称五百枝といつた。19代吉哉の代に、世は明治となつた。

(4)近代・現代の大友家



吉勝は、剛毅な人で武術の達人であった。明治十年、西南の役に従軍し



大友ヒサエさん

帰還後、学務委員、戸長に任ぜられた。明治二五年、自費で塩湯彦神社・社殿を建てた。21代吉敏、神職のかたわら農林業を営んだ。吉敏にも嗣子なく長女シナに角間(湯沢市弁天)の士族伊藤安定の三男武三郎を養子とし家系と神職を継承した。22代吉定である。吉定は小学校の教員を勤め退職後は、八沢木村(大森町)村長、秋田市神社庁長を歴任した。

昭和三三年大友家は火災にあい、多くの古記録を焼失した。吉定の後嗣は長男の正臣、23代吉教である。吉教は、父について神職と教職を兼ねた。前田小学校(大森町八沢木)在職中に死去した。夫の死去に驚愕したのは、夫人のヒサエさん。いつまでも悲嘆にくれているいとまとてなく、一ヶ月以内に神社宮司の変更届を手続せねばならない。ときに長男の千

之氏は国学院大学から大学院に進み神職の資格を得ていたが、一宮市に住居を構え「祝聴覚教室設計」に従事していた。大友家では千之氏以外に神職の免許を得ていた者はいない。そこで急速千之氏に宮司を継承してもらい。ヒサエさんと次男の克己氏は国学院の神職講習を受け、神職資格を得て神事を継承した。

こうしたことにより宮司は一宮市に住み、克己氏は家系24代を継承し禰宣、母氏のヒサエさんと克己氏の夫人は権禰宣、一致して古代からの神に奉仕を続けている。ヒサエ夫人は夫の卒去後、神社の経営と霜月神楽の伝承、巫女(みこ)の後継者育成に力を注ぎ、その努力の成果によって、昭和五四年六月「秋田県民俗芸能協会」の表彰を受けた。

霜月神楽は、昭和四二年二月、

山口 民 弥 正敬
土 崎 久米司 直国
紀 弥 刑部 直甫
佐 藤 相模頭 行政
滝 下 相模頭 行政
牧 尾 伊勢正 重政
伊 藤 民 弥 重政
小 早 川 伊勢正 重時
高 橋 弁 藏 清政
高 橋 龜 弥 家喜
高 橋 相模正 家政
高 橋 民部 吉逸
伊 藤 主 水 正庸
近 谷 諫 女
慇 谷 越前正 孝命
鈴木 相模頭 森香
高 橋 宋 女 秋広
右の門人の多くは、神主を中心とした人達によって占められている。門人の銘々について誌す遺は、今ここにはないので、何れ機会を得て紹介したい。

※参考文献・資料

平田篤胤全集別巻・門人姓名録(昭和56・6・25、名著出版社発行)

平田篤胤と秋田門人(昭和51・10・31、相原善雄編著発行)

大友家文書

奥羽永慶軍記

入門

文政二〇、四、二

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

秋田叢書所収「雪出羽道」(平鹿郡)

秋田県の地名(一九八〇・六・六、平凡社発行)

秋田人名大事典(昭和49・8・1、秋田魁新報社発行)

大森町郷土史(昭和56・12・1、大森町発行)

秋田県文化財(平成元・3・31、秋田県教育委員会発行)

秋田の杜家と神子(佐藤久治著・一九七九・一・一発行)

高 宮太夫 国元

紀 肥 富 真宗

滝 下 勇 人行信

今 田 内 記 真政

鈴木 正 枝 重治

高 野 但馬頭 盛武

佐 藤 宮之正 重永

斎 藤 宮三郎 満由

伊 藤 多 仲

川 越 佐 久

鈴木 清 馬 重政

番 場 伊勢雄 房次

番 場 主 鈴 房重

鈴木 真 人 重教

由利郡矢嶋領

平鹿郡大沢村

仙北郡長野村

由利郡勝平村

仙北郡北野目村

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

入門

文政二〇、四、

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

"

二、入江種健(種彦)・種敏兄弟家

(1)入江家は常陸佐竹家の譜代

衆

平田大人没後の秋田入門弟に、

入江種健・種敏兄弟が「門人姓名録」に名をつらねている。入江兄弟は明治四年二月五日の同日、小

野崎通祐の紹介によって入門したと、右の門人姓名録にある。

小野崎通祐とは秋田藩の維新革命で勤王派の先駆者として名があり後年、貴族院議員に列し没後、

従四位を追贈された神道家で、小

野崎通祐とは秋田藩の維新革命で勤王派の先駆者として名があり後年、貴族院議員に列し没後、

従四位を追贈された神道家で、小

野崎通祐とは秋田藩の維新革命で勤王派の先駆者として名があり後年、貴族院議員に列し没後、

従四位を追贈された神道家で、小

野崎通祐とは秋田藩の維新革命で勤王派の先駆者として名があり後年、貴族院議員に列し没後、

従四位を追贈された神道家で、小

野崎家系図には「通亮(みちすけ)と記録されている。

入江家は佐竹南家(湯沢)の家

老職を勤めた家で、藤原鎌足以来

の名家である。同家の由緒に「遠

祖は藤原鎌足の孫武智麻呂の後裔

工藤木工助が重を経て、馬大夫維

清が駿河国有渡郡入江郷を領し、

家号を入江と称したのが入江家の

創始。現存する最も古い資料は、

入江駿河守藤原茂国の記録で、常

陸にあって佐竹家の譜代となっ

た」という。

(2)近世の入江家

入江家々果由緒

入江家の始祖は古く大抵源満家鎮定公(文化二年、六十八年)の孫高藤原武智麻呂(太平十二年、七四〇年)・藤原乙麻呂(天安元年、七八五年)と云ふ。乙麻呂の弟藤原良虎(平治元年、八五八年)も又乙麻呂の子と云ふ。其子藤足朝光也。藤原親河守・親清(鳥羽天皇、和名鳥羽院)が駿河國有波郡に入江郷を創するにまゝ入江親河守藤原良太海清と名のる。これが入江氏の始祖と伝へられる。

延元三年(三三八年)足利尊氏征夷大將軍となり與國元年(三五四年)北条氏に代り政權を得り足利義満府成立す。興國三年(三六四年)北条氏より三四戸北品親房卿寄附せしむる。入江家祖祖入江親河守藤原良太海清四百年子の後裔入江親河守北品親房卿の家臣として仕へたる。興國三年(暦保五年、一四四一年)北品親房卿告野に事をも入江親河守宗隆ありて、後佐竹家臣として仕へたる。

入江家世々の家臣に北品親房卿にせよと時代の正千三年(一三四八)所作の體現存す。

二より正千五年の條も入江親河守藤原成國と書けり。入江親河守藤原克矢新天正十三年(一五六四年)客死ありて佐竹家長藤原宗方より叔父山内州判の折義達公に就て出陣申請を受けり感状を賜ひける。

永祿年間には至り佐竹家三千代佐竹義直公・主代佐竹義直公と勢力を争ひ、天正八年(一五九九年)佐竹義直公によつて滅び、その後は京都の對に徳川家の藩となつて居たりて、慶長七年(一六〇二年)佐竹義直公常陸國より村州狀由に連村御歸り命ぜられたる。連村に降り、湯上佐竹義直公藤原信竹義種公の命により入江親河守藤原克矢新・長子藤原親河守次男藤原忠孝等の父子三人家族五人上下人衆隨より先遣して村州狀由にする。後義直公の命により久保田の領地の地味澤に而從佐竹義種公の殿付に充めたる。連村に事々先遣して又後の村州開拓にもよく功績にして、表封を御名に字授け使用を賜ひり以來入江親河守藤原忠孝惣兵衛權政・長子と入江親河守藤原親河守藤原成國と持奉と名のり累代禮稱一字を互に傳ふるを入江家の傳ひとする。

入江家系と由緒

慶長七年（一六〇二）佐竹氏の秋田転封のさい、入江駿河守藤原惣兵衛は、大守義宣の命で長男門兵衛、次男采女の父子三人と家徒五人、上下八人先遣となり湯沢に移り、佐竹家一門佐竹義種（湯沢所預）の補佐となり勤仕した。先発の功を賞し佐竹義種は下の字「種」を賜わり惣兵衛は名を種政、長男は種廣、次男は種奉と名乗った。以後、代々「種」を通字とした。

種政は沼の台山、鉦打沢（山谷）一帯の地の代官を仰せ付かった。本田三五石、開（ひらき）二五石、計六〇石の知行を拝領した。このあと自力の開田地を加え、家禄は一〇一石となった。慶長十九年（一六四四）十月、大坂冬の陣に出陣し、功

により短刀一振り拝領した。目付役、家老職を勤めた。寛永十年（一六三三）九月五日卒。湯沢内町（湯沢山清涼寺）境内に葬った。湯沢入江家の初代である。清涼寺は、主家（佐竹南家）の菩提所である。種政のあとが二代目駿河守種廣、次いで三代種次から九代まで八右衛門を通称した。

種廣は本田・開田合わせて一八〇石領し、弟種奉に五〇石を分与し北荒町東側に分知した。寛永年間（一六二四―一四四）湯沢の大火に類焼した入江家は常陸以来の家系図、家宝の多くを失った。寛永六年（一六六六）八月卒。三代種次、一〇石加増され、弟種則に一〇石分与し分家した。種則は目付役を申付けられたが断わり、貞享三年（一六八六）八月改易となり家は断絶した。その翌年九月、種次は、51歳で卒した。四代種晶、勤功により加増され、家禄二〇〇石。享保二〇年（一七三五）一一月卒、67歳。

種晶の嫡子五代種浮の代、延享元年（一七四四）六月、主君義伯30歳で死去し、嫡子（後の義館）数えて2歳の幼童なるため義伯の弟義持が家督した。末期養子のため禄八三〇〇余石の内から三分の

一削封された。そのため家上の家禄三分の一、主家に返上することになった。よって種浮の家禄は、三分の一減石となった。宝暦一〇年（一七六〇）三月卒、69歳。六代種珍、七代種致、種致は日置流道雪派の弓術指南で、主君義珍に弓術を教授した。加増され、禄高一〇〇石二斗余。文政三年（一八二〇）三月卒、68歳。八代種記、九代種隣。

種記の子は娘一人だったので、引川家から婿養子を迎えた。九代種隣である。種隣は戊辰の役のさい70歳近かったので、嫡子の種富と孫の種健・種敏を出陣させた。明治八年四月卒、77歳。種隣は明治四年、菩提所清涼寺を罷め神道に改宗した。

(3) 戊辰の役に父子三人出陣

種富は、戊辰の役に長男種健（種彦）次男種敏と父子三人出陣し、種富は志摩（十文字町）・神宮寺（神岡町）で奮戦した。

この役後で湯沢町は戦火によって多くの家屋・土蔵寺が焼失し、人江家においても多くの家財・記録・宝物を失った。

種健は神宮寺合戦に勇戦し藩主義堯に拝謁、御賞言を賜わった。種健の弟種敏は、父兄とともに戊

(5)近代・現代の入江家
入江家一代種彦に男子なく、娘キシに婿養子を迎えた。二代種成である。種成は新庄（山形県）戸沢氏家老杉山重兵衛清長の二男。函館師範・上野音楽学校を卒

書簡の日付は、明治十二年三月廿五日。宛名は、篤胤没後の門人。入江許登自は、入江種健（種彦）老後に号した名。伊藤清司は門人帳に洵治とあり、名乗は僧敏、雄勝郡稲庭の人。書簡の書出しは鉄胤であるが、眼気を催したというので養子（末弟）の胤雄に本文を代筆させ、二白（追而書）を自身で書いた珍しい書簡である。鉄胤は翌年の明治十三年十月十五日、83才の天寿を全うした。

業し弁天小学校校長、須川村長などのあと、自宅を開放して入江刺しゅう教授所を設立、女子の教養と書道教育に当たり多くの後進を育成している。また、山形県に釜淵製材を創設した。大正八年二月、六三歳で他界した。

種成の嫡子保彦、一三代目を継承。保彦が通字の「種」を用いなかったのは二男だった（長男は早世）からであるが、死後に種彦の名を追称している。秋田師範を卒業して教壇に立ち、三七歳の若さで三関小学校校長を勇退したあと「爛漫」秋田銘醸に勤め、宣伝・販売を担当した。このほか北荒町町内会長、納税組合長、司法保護司会長など社会・福祉・厚生事業に貢献すること四五年余、その功勞で湯沢町功勞章・藍綬褒章・勲五等瑞宝章などの榮譽を贈られた。昭和四十六年一月一日、81歳で死去し、従六位を追贈された。栄光に輝く生涯であった。

種彦の嫡子一四代種友氏（大正8・10・7生）は、現当主。昭和戦争に動員（一七年一〇年）となり、昭和二〇年十月復員した。陸軍中尉。復員後、羽後高校長・湯沢北高校長に就任。横手中学時代からスキーで活躍し、湯沢スキ

ークラブ会長・県スキー連盟副会長・永年にわたる湯沢北高スキー部監督を務め、全日本・国体・インターハイなどに出場、同校に優勝二十数回をもたらした。種友氏の妹フキさんは、奥山氏夫人。フキさんの弟は正氏。

正氏は、海軍中尉。昭和戦争に従軍し、中部太平洋方面艦隊司令部付。司令部所在地はサイパン島、司令長官は南雲海軍中将（死後大將に進級）。サイパン島には陸軍の第43師団（長・斉藤義次中将）が、師団司令部を設置していた。昭和19・7・6、サイパン島陸軍玉砕し南雲・斉藤両中将は共に割腹して果てた。このとき入江海軍中尉は南大東島に出張中で、玉砕を免れ生還できた。剣道五段。東京都中野保健所総務課長退職。東京都練馬区居住。正氏の弟進氏は、剣道の達人。防衛庁厚生課退職、神奈川県茅ヶ崎市居住。進氏の弟



入江種友氏

卓氏、防衛庁自衛隊仙台地方連絡部総務課長退職、秋田市居住。種友氏の長男種彦氏、秋田市在住の会社員。三男久氏は高校の先生、湯沢市在住。

種彦（二一代）の弟種敏は兄種彦（種健）と同日、平田大人没後の門人に入門した「平田門弟」。戊辰の役後における種敏は松井家（妻の生家）に「寺小屋を開設し、いわゆる説・書・算を教えた。次いで明治初期の教員に転じ、弁天（湯沢市）・東成瀬（雄勝郡）小学校等の校長兼教員を歴任した。妻の猶子は築城学の権威、陸軍中将松井庫之助の姉である。種敏の長子種矩は陸軍士官学校卒（東條英機と同期）であったが、上司と意見が合わず退役。のち満洲に渡り満蒙義勇軍を組織して、馬賊の隊長。とうたわれた。また、肅親王の代理として蒙古のパブチャップ將軍の総參謀長となり、満蒙の大地を駆けめぐり、当時のロシア軍を震撼させたという。なお日本に亡命した孫文をはじめ蒋介石、黄興らの指導でも知られる。大正三年八月、第一次世界大戦にさいしては青島攻略戦に工兵大尉で出征、以後は満蒙独立運動に参加し、満洲国建設の先駆的役割を果たした。

た。昭和二六年一二月、湯沢で69年の波乱にみちた生涯を閉じた。種矩の弟種正は名古屋師範を卒業し「千代田生命保険」に入社し昇進して、大連（中国・満洲）支店長に栄転した。昭和四一年故郷の地湯沢に没した、78歳。

種正の弟三郎は、兄と同じく陸軍士官学校卒。仙台歩兵第四聯隊中隊長在任中に部下の外出現則違反の責を負って大正一五年退役し郷里に帰って、外国向け特殊商類栽培事業に従事し、そのかたわら剣道五段の腕を生かし郷里の青年に剣道を指導した。また、湯沢町議も務めた。詩文を草し書画への鑑賞眼にも富んだうえ歴史にも精通、とりわけ秋田戊辰史に詳しくかつた。支那事変の勃発により歩兵第三百十七聯に動員となり、昭和一三年七月二日、北支河南省西陽村の激戦で戦死した。46歳。彼の勇猛ぶりは聯隊一で、鬼隊長と呼ばれた。正六位勲五等功四級。陸軍歩兵少佐。

三郎の弟五郎は、兄とは逆に無産運動の道を進み昭和二年一月、労働党東南支部副支部長となり無産運動の闘士として活躍した。また無産党から県議に立候補し、当選した。有志と相計らい雄勝医療

(6) 入江家略系

常陸に在って佐竹家譜代

入江駿河守藤原茂国

湯沢初代

駿河守 惣兵衛

種政

2代

駿河守 円兵衛

3代

八右衛門 弥惣太

種廣

采女 分家

種奉

種則

円右衛門 分家

貞享3年改易断絶

4代

庄助 道仙

5代

八右衛門 弥惣太

種晶

6代

八右衛門 惣兵衛

7代

八右衛門 罷休

種珍

種致

8代

八右衛門 惣兵衛

9代

八右衛門 庄助

種汎

種隣

種隣の妻 弘化4年没

10代

勇馬 金吾

11代

種武 種健

種富

平田大人没後の門人
弘化四年八月八日生

卓

進

正

フキ

種友

14代

大正八年十月七日生

重男

英子

仙台住

東北福祉大学助教授

種彦

昭和二年生

保友

昭和二年生

久

昭和二年生

12代

種成

慶応元年十月十八日生

種成妻

キン

昭和三年卒61歳

13代

保彦(種彦)

明治三年一月二日生

種矩

明治十六年生

種正

明治二十二年生

三郎

明治二十六年生

五郎

明治三〇年生

雷蔵

種敏

嘉永四年一月廿七日生

安定

伊藤蔵之助養嗣

安政三年七月十三日生

組合を設立（現、雄勝中央病院の前身）した。

(7) 種敏の弟安定

種富（10代）の三男安定は、弁天村角間（湯沢市）の上族伊藤蔵之助祐匡の婿養子となった。

伊藤家の大祖は藤原鎌足、鎌足49代の子孫伊藤兵部助家は庄内大山城主（山形県鶴岡市）。天正十五年（一五八七）最上義光に攻められ大山城は落ち、助家は雄勝郡角間村に移り帰農した。慶長一三年（一六〇八）三月二十九日没、91歳。

助家12代、つまり伊藤家60代の後裔は政五郎（助右衛門）祐中。祐中は弁天村字角間地内を開墾（13町歩4反余）し、天明の飢饉（一七八三）に米二百俵、及び文銀三百匁を献じ、佐竹藩主それを嘉賞し士分に列した。かくして祐中は、

佐竹南家の家士となった。妻のタマは、飯沢村の鈴木全之助長女。鈴木家の祖は、源義経の臣鈴木三郎重家。住家は、国の重要文化財（昭和48・2・23、指定）。

祐中の曾孫が、蔵之助祐匡。祐匡の長女ナオに、入江種富の三男安定が入婿した。安定の長男政太郎（祐幹）は教員、父安定の兄種敏の女（タマ）を妻とした。弟の武三郎（安定三男）は大友吉敏の

婿養子となり、22代を継承し吉定と名乗った。政太郎の子息緑郎（祐一）氏は明治45・2・6生れ、42

年間にわたる学校の先生（小・中学校の校長等）。退職後は10数種にわたる会の役員（会長）に推された地域における活動家。このほか「山田文学会」、湯沢を中心とした「雪国文学会」を創設（主宰）した。

氏の文学作品「村の春秋」は連続出版し10数冊におよび、小説けだに部落今昔」ともども、史実をふまえた代表的名作である。長男の国光氏は、湯沢高校に奉職する教員。

伊藤家は、大友家と入江家の中間にあつて、何んか「橋渡し」のような感じがする。

※参考文献・資料

平田篤胤全集別巻・門人姓名録
平田篤胤と秋田門人
秋田県の地名
秋田人名大事典
入江家系譜および古文書（入江家蔵）
秋田県の文化財
（本所研究調査員）

研究所記事

- * 04・01・16 「月刊平成塾」雑誌社
平田篤胤気吹合について取材来所
- * 04・02・16 羽後町西馬音内佐藤信淵祭（北嶋昭所長参列）
- * 04・05・01 彌高神社例祭
- * 04・05・01 彌高書第五輯発行
- * 04・05・01 研究所報第六号発行
- * 04・07・25 佐藤信淵大関係遺跡地図改訂版発行
- * 04・08・10 第18回研究調査委員会 彌高神社齋館
- * 04・08・24 平田篤胤大人墓前生誕祭 講話「平田篤胤碑について」田口孝治氏
- * 04・08・24・09・10 平田篤胤大人生誕記念資料展 彌高神社齋館
- * 04・08・30 古神道仙法教平田篤胤大人生誕記念資料展見学 同関係遺跡巡見
- * 05・01・01・01・17 塩釜神社博物館「黄金花咲くみちのく展」に佐藤信淵大人関係著述書出陳
- * 05・02・14 佐藤信淵祭参列 羽後町西馬音内 北嶋昭所長
- * 05・02・23 第19回研究調査委員会 彌高神社齋館

研究活動

- * 「平田篤胤大人の秋田の門人一覧」北嶋昭稿 04・04・01 私家版ノート
- * 「考証佐藤信淵飢饉の旅路」川越

重昌著（彌高書第五輯）04・05・01

* 「佐藤信淵の神道観・序論」信淵の神道観萌芽の考察」齊藤壽胤稿

「平田大人門弟家の由緒消息・川尻祝部國豊家の巻」澁谷鐵五郎稿 研究所報第六号所収

* 講話「島崎藤村の「夜明け前」と佐藤信淵」齊藤壽胤 05・05・02 彌高神社例祭

* 講演「佐藤信淵に学ぶ」齊藤壽胤 秋田の史跡を学ぶ会 04・06・10 秋田市東部公民館

* 佐藤信淵大人関係遺跡巡り同行解説 佐々木榮孝 04・06・24 羽後町西馬音内郡山他

* 平田篤胤大人生誕記念資料展展示 北嶋昭／齊藤壽胤／佐々木榮孝 04・08・22・23 彌高神社齋館

* 平田篤胤大人生誕記念資料展示解説 齊藤壽胤 04・08・30

* 高等学校教員初任研修講話「地域の歴史と文化の学習」郷土の偉人 平田篤胤佐藤信淵両大人」北嶋昭 彌高神社齋館 04・09・10

* 講義「秋田国学と平田篤胤」地方維新の行方」齊藤壽胤 04・10・19 土民倶楽部研修会

* 05・01・22 平田篤胤関係稿本等調査出張 青森市 北嶋昭／齊藤壽胤

関係稿紹介
（私塾の研究―日本を変革した原点―童門冬二著 平05・02 P H P文庫「気吹合雷風義塾」）